中央家畜市場通信

令和７年10月号

盛岡農業改良普及センター作成

早めの冬支度で健康な子牛を確保しよう

10月になり、朝晩が冷え込む時期になりました。冬が来るまでまだまだですが、寒くなれば人間だけでなく子牛も風邪をひきます。

子牛を寒さから守り、健康で発育の良い子牛を育てましょう！

なんで寒冷対策が必要なの？

子牛は成牛と比較して寒さに弱い特徴があります。それは、

①皮下脂肪や被毛が少ない

②体重あたりの表面積が大きく熱が逃げやすい

③ルーメンが未発達のため発酵熱が少ない

という３つの理由があるからです。

また、哺乳子牛は**５℃が下限臨界温度**（寒冷ストレスによりエネルギー消費が増える温度）となります（表１）。気温が５℃を下回ると、発育不良や疾病の発生など、発育に大きな影響を与えてしまいます。そのため、特に生後６週間くらいまでは子牛を保温してあげることが大切です。

表１　肉用牛の適温域と下限臨界温度

	適温域[℃]	下限臨界温度[℃]
哺乳子牛	13～25	5
育成牛	4～20	-10
繁殖牛	10～15	-10
肥育牛	15～25	5

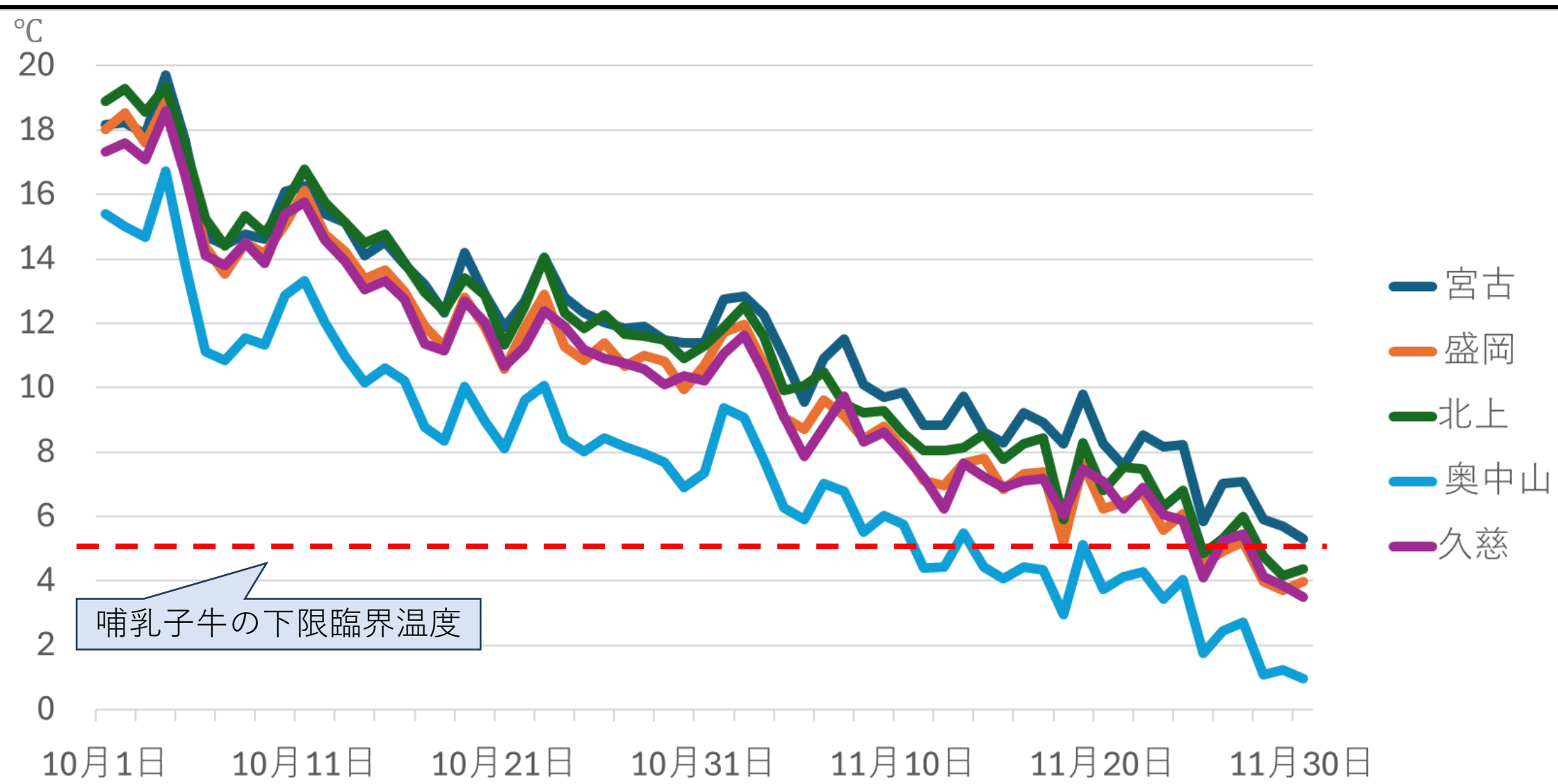

図１　中央市場管内の平均気温

中央市場管内の過去５か年の平均気温を見ると、奥中山で11月上旬以降、他の地域では１１月下旬以降に哺乳子牛の下限臨界温度を下回ります（図１）。

今から寒さ対策の準備を進めて、子牛の健康を維持しましょう！

対策は裏へ

具体的な対策について

1.カーフジャケット等で子牛を保温

　カーフジャケット（写真１）やネックウォーマーを使用して、子牛を保温しましょう。古着やバスタオルを首などに巻くだけでも効果があります。

写真１ カーフジャケットを着た子牛

2.投光器・カーボンヒーターでの加温

　子牛の寝床が寒くないように、投光器やカーボンヒーターを活用して子牛を温めましょう（写真２）。

近くに燃えやすいものがあると**火災の原因**になるので気を付けましょう

3.敷料を乾いた状態に保つ

　濡れた牛床は子牛のお腹を冷やし、体調を崩す原因となるため、子牛の寝床には乾いた敷料を厚く（10cm以上）敷き、床冷えを防ぎましょう（写真２）。

4.すき間風を当てない

　外からのすき間風は子牛を冷やしてしまうため、コンパネやシートなどで隙間風を防止しましょう（写真２）。

閉め切ってしまうとアンモニアガスが溜まり、呼吸器病発生の原因となってしまいます。
こまめに換気や除糞を行いましょう

写真2　優良事例

繁殖サイクルを回してガッチリ ～見えない儲けをわしづかみ！～

　第５回は、『繁殖牛の管理（交配適期）』についてでした。受胎率向上に向けて、日々の発情発見を怠らず、適期に交配できるようにしましょう。
　今回は、岩手県立農業大学校（以下、「岩手農大」）で実際に実施している繁殖管理の事例について紹介します。

↑県飼養管理マニュアルのダウンロード

第６回 繁殖牛の管理（優良事例紹介）

　岩手農大では、テイルペイントと発情同期化法を活用して繁殖成績の向上を図っています。

テイルペイントの活用

　発情予定日が近い、放し飼いの牛にテイルペイントを塗ります。**朝と夕方の２回**確認し、テイルペイントがはがれていたら**交配適期に人工授精**します。人工授精後１ヶ月を経過してもはがれていなかったら妊娠鑑定を実施します。
　また、交配適期に授精するため、朝はがれていたらその日の午後に、夕方はがれていたら翌日の午前中に人工授精をします。

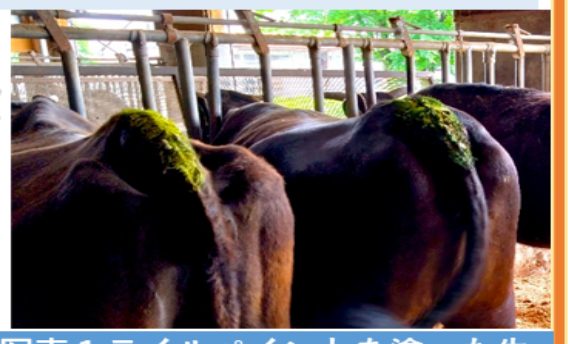
写真１テイルペイントを塗った牛

発情同期化法の活用

　繋ぎ飼いなどで乗駕行動が確認できず、粘液等の発情兆候も見られない場合に実施します。岩手農大では図１のように実施しています。

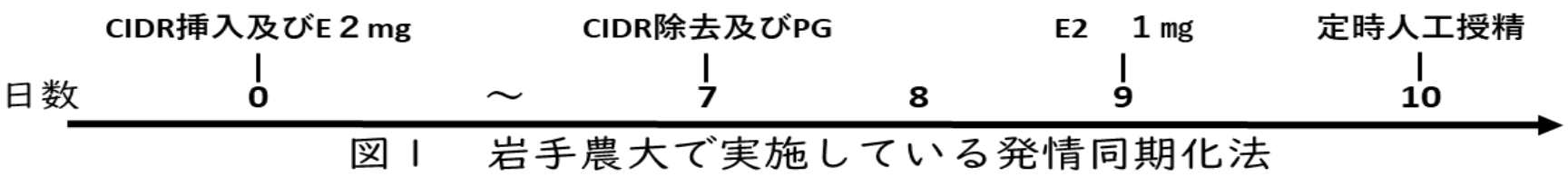

図１　岩手農大で実施している発情同期化法

例を参考に、朝夕の発情確認と交配適期の人工授精の徹底により１年１産を目指しましょう。